

【連載：「私とオーディオの出会い」 Vol.6】

一般社団法人日本オーディオ協会

会長 小川 理子

この五年間で、関西フィルハーモニー管弦楽団と三回も共演させていただいた。いずれも、素晴らしい響きの大阪のいずみホールである。ピアノは、スタインウェイのコンサートグランド。

一回目が2014年8月、この時は9月にベルリンの国際展示会でテクニクス復活宣言をするという大役を担っていたが、関西フィルとの共演が決まったのが2013年1月、テクニクス復活の責任者として転勤が決まったのが2014年3月、ということで、すでにコンサート出演が決まっており、自分の中では、よりによって一番練習の必要な演奏会がこんな一番大変な職務の遂行に重なってしまった、人生ってこんなもんだなあ、と、妙に納得しながら、朝5時起きで、ガーシュウインのラブソディ・イン・ブルーを練習した。二回目は、2017年8月、指揮者の藤岡幸夫さんから、次はバッハをやろう、とお声がけいただき、昔からバッハが大好きな私は、ウワア嬉しい！と、その後の修行にも似た練習の必要性を想像もせず、ピアノ協奏曲第一番、を選ばせていただいた。選んだ理由は、せっかくオケと共演するのだから、自分でもあまり経験のない弾きごたえのある曲に挑戦しよう、という動機から。どの楽章も、城塞のように完璧に構築されており、ジャズ特有の音で遊べる隙間が見つからない。それでも何箇所かは、ソロの部分で、ジャズアレンジを試してみた。また、バッハ特有のテーマの綴れ織が次から次へと展開し、ちょっと油断すると無限ループから抜け出せない。それでも本番では暗譜で弾きたかったため、そのつもりで準備をしていた。暗譜がいいのは、楽譜という視覚からの情報が、演奏という身体運動に変換されるまでがほぼ同時であることにプロセスパワーを消費するため、創造性の扉が開きにくいという現象に陥らない。暗譜とは、いったん脳のメモリーに格納されれば、その情報を同じ脳内に呼び出すだけであとは自在に表現できる、大脳が一番深いところが開き出す、圧倒的に脳の喜び方が違う、という素晴らしい方法論である。そしてこの領域にたどり着くには、何度も何度も、明けても暮れても、繰り返し脳に覚えこませながら同時に身体感覚を獲得することが必要になる。音楽とは一瞬の記憶ではなく、一定の時間を伴う芸術であるから、暗譜そのものにも物理的に時間がかかる。ところが、このバッハ、



本番2日前のリハーサルで私は大失敗した。途中で無限ループにはまってしまい、演奏を中断させてしまったのだ。その日は朝から会社に出勤をし、ハードにスケジュールをこなし、夜のリハーサルだったから疲れのせいかもしれない、と自分を励ました。しかし、翌日、本番前日のリハーサルでまたもや失敗した。練習できていたことが、なぜできないんだろう。その日も出勤しての夜のリハーサルだった。しかし言い訳はできない。ああ、前日に失敗するとは。。。頭は真っ白だった。もう明日の本番はダメかもしれない。自身の人生で今まで、悩んだことはあっても、弱音を吐いたことはない、しかし、この時ばかりは、私一人の失敗で、オーケストラの皆さんと楽しみに来てくださったお客様にとんでもないご迷惑をおかけしてしまうかもしれないと、本当

に落ち込んだ。助けてくれる人はいない、ソリストが本番で失敗するなんて、普通はありえない！やはり自分には、荷が重過ぎたのか。。。オファーを受けなければ良かったのか。。。と、ますます心は沈んだ。とその時、うまくいかなかったリハーサルのあと、固まっていた私に、藤岡さんが、「大丈夫だよ～、楽譜見ていいよ～、止まったって何だってオケは付いていくから！」と笑顔で話しかけてくださった。ああ、藤岡さんはなんと凄い人だと改めて思った。なんとしても失敗できない。。。。

家に帰って、主人に、うまくいかなかった、明日は失敗するかもしれない、と落ち込みながら話したら、「今ここで悩んでも仕方がないよ、本番に強いんだろ？明日は大丈夫、とにかくご飯食べて早く寝たら？」と言ってくれた。

藤岡さんと主人の前向きな言葉に、私は一晩のうちにすっかり開き直ることができて、ゲネプロも本番も、よく出来ました！という結果だった。



そして三回目の共演は、2019年2月、この日のプログラムは、再度ガーシュウインのラブソディ・イン・ブルー。

この日の演奏は、前回のバッハで修羅場をくぐったのが功を奏したのか、これまでにない力を発揮でき、藤岡さんからもお客様からも、凄いパワーを感じた、とご好評いただけた。この演奏の中で一点、大変興味深い発見があった。冒頭のソロ

パートに入る前のほんの短いイントロダクションでジャズアレンジをしようと、練習もリハーサルもゲネプロもそのアレンジで弾いていた。ところが、本番で自分の意思に反して指が動いたのは、昔から弾きこんできたオリジナルのフレーズ。あれ？こんな風に弾こうと思っていなかったのに、なぜ指が勝手に動くの？と動揺が起こったが、すぐに冷静になり、とにかく最後まで弾き終えた。満足感はあったが、最初の体験については脳と意識と身体運動を考えるうえで貴重な材料になった。

IoT や AI が花盛りの今、サイバーフィジカル、デジタルツイン、など、仕事においてはデジタルトランスフォーメーションが日常化している。昨年末、30代、40代の、シリコンバレー育ちの若い世代の方々と、「感性と技術」というテーマでディスカッションをしたとき、面白い対話ができた。彼らは、全てはデジタル世界にある、と言うのだ。私はそれに対して即座に反論した。私の得意なハーレムス



トライドジャズを演奏していると、ドライブレグリーブしまさしく恍惚の境地に入ることがある、私の身体中の細胞が共鳴し躍動し生きているエネルギーを感じる、こんな身体感覚は絶対にデジタル世界では実現できない、と。

そして、先日体験したステージ上での演奏は、脳の中にデジタル情報として二種類のフレーズが存在したときに、無意識に身体が選択した情報が、意思と意識に勝った。つまり、

意思や意識という作られたプログラムは、容易に身体記憶にハッキングされるということだ。身体記憶は、たぶんアスリートと同様の感覚だと思う。身体感覚までもがデジタルだと言い放つ世代には、もはやサイボーグがあふれる世の中で人間が住む未来を全く疑問に思わず歓迎しているとしか思えない。

令和の時代に入り、かく言う私は昭和な人間なのか。。

次回に続く。。